

雄山



学校の門を通過し、ふと顔を上げると遠くにうっすらと富士山の姿が見ることがあります。太平洋の向こうに静かに浮かぶその山容には、凛とした美しさはどこか神聖さすら漂っています。そして、朝、校長室の窓を開けると、今度は島の中心にそびえる雄山が空の青にその輪郭を描いています。

三宅島の子供たちは、海と空、そして火山に抱かれたこの島の中で、日々の学びを積み重ねています。自然の大きな景色の中で育つことは、時に不安や不便も伴いますが、それ以上に心の広がりとしなやかな強さを育んでくれていると感じます。富士山と雄山。二つの火山に見守られながら、今日も笑顔で過ごしています。

さて、気象庁の発表にもありましたように、令和7年6月17日（火）三宅島の噴火警戒レベルが1から2に引き上げられました（火口周辺への立入規制等。住民は通常の生活）。これを受けて、村教育委員会には小・中学校の校長が参集し、迅速な情報共有と今後の対応を確認しました。また、昨日は教育庁から指導部や総務部の方々も来島され、学校現場の様子を視察していただきました。子供たちの健康と安全を第一に、東京都や三宅村の皆さんと連携して対応を進めてまいります。

2000年の噴火から25年。全島避難や学びの場の喪失、そして再建の歩みは、今も島の人々の心に深く刻まれています。だから、私たちは今、連携しながら、冷静に確実に「備え」を進めていく必要があるのだと感じています。

ちょうど25年前の7月8日午後6時43分、2000年の第1回目の噴火が発生しました。校長室の本棚に残された『避難生活記録集 第1部』（平成12年度 三宅村立小学校発行）には、「突然の避難勧告と学校」という見出しのもと、こう記されています。

『それは突然の村内放送で始まった。6月26日（月）午後7時33分「午後5時半頃より地震が頻発しています。噴火の恐れがありますので十分注意してください。」誰もか、まさかと思った長い長い避難生活の始まりだった。その日の夜から避難と解除を繰り返し、地震の回数も日を追って多くなっていった。学校行事のほとんどが中止を余儀なくされ、落ち着く暇もなく1学期が終わっていった。』



この前兆があった2週間後の7月8日に第1回目の噴火が起こり、頂上陥没による噴煙と降灰が、その後の噴火活動の始まりとなったそうです。緊張感、先の見えない不安、そして子供たちを守ろうとする大人たちの姿が目に見えます。今までの諸先輩方、当時の校長先生や教職員の皆さんが、混乱の中でも安全と学びを第一に尽力されたことに、深い敬意を覚えます。

その努力と献身があったから、今、私たちは穏やかな日常の中で子供たちの笑顔を見守ることができているのです。だからこそ、私たちも備えます。記憶を風化させず、教育を止めない仕組み、そして子供たちの心を守る環境を整え続けること。それが、今を生きる私たち学校現場の責務であると考えています。

今年8月29日（金）には、学習用端末を活用した「オンライン朝の会」を実施する予定です。長い夏休み明けに担任や友達と顔を合わせることで不安を和らげ、新学期への期待感を育むとともに、災害時に備えた通信環境の確認にもつなげていきます。また、4年生の学習では、「防災」をテーマに、総合的な学習の時間で2000年の噴火を題材に探究活動を進めています。三宅島における教育とは、知識を伝えることにとどまらず、自然と向き合う知恵や仲間と助け合う力、変化に対応する柔軟さを育むこと。火山とともに生きるこの島だから、育まれる「生きる力」があると信じています。

空に浮かぶ富士山も、中央に立つ雄山も、静かに語りかけてきます。「自然を恐れず、敬いながら、ともに歩いていこう」と。これからも地域と保護者の皆さんと手を携え、「島の宝」である子供たちの未来を、しっかりと支えてまいります。